

丸 山 孝 男

研究課題 イギリスの社会と言葉

発表誌・発行所 「明治大学教養論集」 216号

表題 イギリスの社会と言葉 (2)

梗概 在外研究員としてイギリスに滞在していたころ、毎日、数種の新聞を読むことを日課としていた。そのとき気がついたことはイギリスの新聞の記事の書き方や社説、論説などにそれぞれ特色があるということである。いたずらに世論に迎合することなく、新聞社独自の考えなり主張がある。日本の新聞は中立性の名のもとにどっちつかずの場合が多い。どの新聞を読んでもだいたい同

じ印象を受ける。特集記事なども一社がはじめると右ならえの場合が多い。そういう意味では日本の新聞は画一的な世論の形成に重要な役割を果している。

さて、政治、経済、社会、文化とあらゆる分野にわたって世の中の移り変わりを克明に報道していく新聞こそ新語情報や流行語の宝庫と言ってよい。とくに新語は新しい社会状況の一側面を映し出す概念であり、アイデアでもある。

具体的な例を挙げてみよう。1988年1月日の記者会見でサッチャー首相は *British Cure* (英国療法) という言葉を使った。言うまでもなくこれは *British Disease* (英国病) に対比させてつくられた言葉である。サッチャー首相が *British Cure* という言葉をつかうとき、自信過剰からそうしているのでもなければ、誇張して言っているのでもない。この言葉の背後には大胆な政策によって達成された保守革命の輝かしい成果がかくされているのだ。まさに *Thatcherism* (サッチャー主義) の勝利と言ってよい。国営企業の *privatization* (民営化)、画期的な税制改革、財政支出の削減などイギリス経済を活性化させたサッチャー首相の大胆な政策が *British Cure* という言葉に凝縮されているのである。

このほかにこの小論でとりあげた言葉は、政治的な意味での *wet* や *dry* のほかに、Media の分野では *Coronation Street* (民放の ITV で放映されている連続人気ドラマ)、*East Enders* (BBCI で放送されている soap opera) などを取りあげたが、今後も言葉を手がかりにイギリスの社会や文化について考察してゆきたい。